
新津発新潟行

ふあんふあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新津発新潟行

【Zコード】

Z9513L

【作者名】

ふあんふあ

【あらすじ】

戸川十一は新潟市内の病院へ向かう列車の中である事件に巻き込まれる。元やくざの彼がとつた行動が、その事件の結末を思わぬ方向へ向ける。

プロローグ

7時52分発、新潟方面内野行き列車

朝の新津駅では、新潟行きの列車を待つ人の列がちらほら見えた。この4番と5番のホームは、10分から20分おきにでる新潟行きの列車で人に溢れる。特に階段の近くはものぐさな学生達に埋め尽くされ、その間を肩身の狭いサラリーマンたちがすり抜ける。

そんな新津駅の朝も、その事件までは何時もどおり平常だった。

「面倒だな……。近くに糖尿を見てくれる医者が居りや良いんだが」

ぶつくさと文句を言いながら、一両目の真ん中ドア付近で四つ折にした小さな新聞記事を眺めるのは、戸川十一とじやだった。

彼は持病の糖尿病の治療の為、いま新津駅から新潟行きの電車に乗り込み、人の波にもまれている最中だ。

『この列車は、長岡発、新津方面亀田経由新潟行きで御座います。列車は6両編成です。おトイレは最後の車に御座います。』

車掌のアナウンスは初々しかった。

おそらく、新卒が簡単な研修を終えて、実務に入ったところだろう。

「おつと……！」

近くに女子高生が滑り込んできたので、十一は体を四人掛け席の隙間に押し込んだ。

「つたく」

小さく毒付くと、折りたたんでいた新聞を鞄に仕舞いこみ、両腕を組んだ。

走り出した列車の中で、人々は思い思いの暇つぶしに勤しんでいた

た。

あるものは携帯電話でお喋り、あるものは花札屋のゲーム機で遊びに夢中だ。

一昔前の若い戸川なら、そんな輩の胸倉を掴んで投げ飛ばす位はしただろうが、今の彼はただの病人であつて、その筋の人間でもない。ただの無職。それが彼の肩書きだった。

不遇者として、暗澹たる気持ちになつた戸川は、そのネガティブな思索の矛先を次の駅に向けた。

いつの間にか出来ていた「さつき野駅」は、新津駅から目と鼻の先。おかげで新津を発車した普通列車は、愚鈍な動きでこの無人駅に停車することになる。

『次は、さつき野、さつき野です』

降り口の案内が無いことに気付いたが、新米なら忘れても仕方が無いし、そもそもこの駅で降りる人間を見たことが無い。

『列車、大変込み合つております。中ほどまでお詰め下さい』

このアナウンスがあるのは大概、次の「荻川駅」である。しかし、今日日、かなり込み合つてているのだろう。

「ちよつと、ごめんよ」

隣に居たサラリーマン風の男の方へ少し詰めると、その男がまた少し詰めた。その隙間にリュックサックを背負つた小学生くらいの男の子が入り込んできた。

「お、坊主。大丈夫か？」

「うん」

大の男の膝小僧辺りに、その坊主の頭が来る。戸川は蹴り飛ばしたりしないように、膝をまっすぐに伸ばした。

さつき野駅を発車した列車は、鰯詰のまま、田園地帯を走る複線の上をすべる。

「なんだか、何時もよりのつそりだな」

普段なら、さつき野から荻川、そして亀田の間は、かなりの速度を出すのだが、今日は違つていたのだ。周りの勤め人たちも腕時計や携帯電話を見やる。

もともと、このキハ52がそんなに速く走るわけではない。しかし、いくらなんでも遅すぎる。

乗客が騒ぎ出すころ、列車を大きな衝撃が襲つた。

車が衝突したようだ。そんな大きな音が乗客の鼓膜を劈く。

「熱い！ 热い！」

前方から、また違つた音が度々響く。ひしゃげた先頭部分から、ものすごい量の蒸気が車両に襲い掛かってきた。

「坊主！ 息を止める」

膝の下で不安そうにしていた坊主の抱き上げるとそう言つた。

戸川は抱き上げた坊主からリュックサックを引っ張り、自分も鞄を捨ててドア付近に何とか体を滑り込ませた。足元にはドアを手動で開くコックがある。これを操作すれば外に出られるはずだ。

「どういうこつた！」

赤く縁取られた小さな扉を開けて、コックを押したり引いたりしても、一向にドアは開け放たれる気配が無い。コックが外れるだけなのか、と、ドアを手で開けようとしても効果が無い。

その間にも先頭車両は高温の蒸気で熱地獄と化していた。

「このままじゃ気道火傷で皆死んじまう……」

戸川は四人掛け席の窓を目指して、また人を搔き分け始めた。

灼熱からの脱出

搔き分け、搔き分け。やつと辿り着いた窓には、同じことを考えていた人間が我先にと折り重なり、微動だに出来ないでいた。

戸川は小僧だけならと、荷物を預けるネットに乗せた。

「這いつくばつても、あっちの車両へ逃げ込め。そつすりやちつたー涼しくなるぜ」

「おじさんは！？」

「なに、心配しよんな。オラあ考えがある」

そういうと戸川は小僧のリュックも荷物網に放り込むと、人々が四人掛け席に殺到する中、蒸気がもうもうと出てぐる運転席方向に駆け出した。

戸川が辿り着いた先。それは、ぐしゃぐしゃにひしゃげた運転席だった。

足元には熱湯が溢れ、戸川の足首までを濡らした。

戸川は辺りを見回し、大きな“マンホール”を見つけた。そのマンホールは、パラボナアンテナのように緩いベースカーブを描いている。

「やつぱりか……」

むせ返る蒸気の中で、戸川は答えを見つけた。

「こいつをタネにせびる為にも、生きて帰らんきやな」

戸川はひしやげた運転席の料金箱を蹴り飛ばすと、普段、車掌や運転手の出入りするドアから線路に飛び降りた。一気に暑さから開放されると、大きく息を吐いた。

「さて、次は小僧だ」

そういうて送り出した小僧が居るであらつ、そのドアまで砂利の上を走るが、ふと思いついたように最後尾車両まで一気に駆け抜けた。

「おい！」

最後尾車両。そこに車掌が居た。

「先頭車両で一体なにが！」

明らかに焦つた表情の車掌が、乗組員室でおろおろしていた。

「やっぱりな、手前エのせいか。ドアが開かなかつたのは」

「え！」

車掌が手に持つている鍵は、車両全体の扉を管理する鍵だつた。それを車掌が手に持つているといふことは、事故発生から直ぐに車掌が鍵穴から引き抜いたことになる。

「そんなこたア後だ。今はその鍵をその鍵穴にぶち込んで、せつさとドアを開けるこつた」

車掌から鍵をひつたぐると、一気に乗組員室に昇りつめ、鍵を差し込むと捻る。

「おい！ セツセツとそのボタンを押せ。両方だぞ！」

そういつて車掌がボタンを押し込むと、全ての車両のドアが開いて、人がボトボトと線路に降つた。

呆けている車掌を見送ると、小僧を探そつと先頭車両まで駆け出した。

おそらくは先頭か、一二両目の進行方向側だ。

「小僧！」

戸川は叫んだ。そして耳を澄ます。

「おじさん、おじさん！」

そうじつてリュックサックを抱えながら、先頭車両の一番後ろのドアの辺りの荷物ネットに居た。

「よし、良くやつたぞ坊主」

そういうて抱きかかえると、殆ど人の居なくなつた車両から小僧を降ろした。

遠くから消防のサイレンの音が聞こえる。戸川は小僧を小脇に抱えると、線路ぎわの民家の敷地へと飛び移つた。

「小僧。ココで待つてたところで病院には連れて行つてもらえねエ。

新津まで戻つてタクシー拾つた

「うん」

戸川は新津駅まで歩き出した。

鉄道警察（前書き）

新潟（下越）方言があつます。*「ちんじー」<小切こ>

「んで、俺に聞きたいことつてなんだいや。てつどーおまわりさん

「鉄道警察です」

戸川は坊主を近くの一次救急病院まで送り届けると、自分の火傷に簡単な軟膏を塗る処置を受け、わざと新津駅まで舞い戻つてき

た。

結局、電車は全てが運休。バスも満員で、仕方がなくヘンテコなオブジェの前のベンチに腰掛けてタバコを噴かしていたところ、鉄道警察の捜査員と名乗る女に呼び止められ、駅前の狭苦しい交番で事情聴取を受けていた。

「周りのお客さんは、アナタが大立ち回りしているところを見てたらしくて、それで少し」と、話を切り出した女捜査員に、渋々と受け答える。

「ああ、ちん」一坊主が居たモンでな？　んで、ちゃんと病院まで連れてつてやつたよ」

「それで、事故の際にアナタ、運転席に向かつたそうですね？」

「ああ、そうだよ。　つと、その前に警察手帳と名前、教えてくれや」

小さな組だったが、若頭まで勤めた戸川は、警察の扱いを心得ている。もちろん、ハコビの際に色々と面倒を起じしてくれる鉄道警察が如何なる物かも、しかと。

「へー。斎藤文江つてんだ」

「　それより、運転席でなにを見たか教えてくれませんか？」

この女“刑事”おかしなこと言いやがる。と小さく毒付く。

早川は自分が犯人扱いされていると思つて、一途に口を噤んだ。

「悪いけど、黙秘だ。犯人扱いするんなら、コッチも考えがあるぜ」

そういうつて早川は懐から携帯電話と手帳を取り出し、知り合いで

弁護士を紹介してもうおうとダイヤルをプッシュする。

「ちょ、ちょっと待つてください。犯人扱いなんてしませんから、少しだけお願ひします」

なにやら焦つた表情の女刑事を見て、なにやらキナ臭さを感じ取つた早川は、カマをかけることにした。それも、「ぐく簡単な。

「するつてーと、JRさんは証拠隠滅でもしちまつたんけ?」

すると、一気に表情を曇らせた女刑事に、悪いことしちまつたかな、と坊主頭をガシガシと搔く。

「ええ、JRは鉄道事故になると、何時もこいつなんです……」

なるほど、と承服すると、戸川は話を諭す。

「俺が運転席まで行つたのは、逃げ道を探す為だ。坊主は荷物ネットに置いて、外に出ようと思つたんだ。かなり熱かつたがな」

「それで?」

「俺は運転席がぐしゃぐしゃになつちまつてて、運転手もずたずただつたし、仕方なく戸閉操作をしに、最後尾の車掌のところまで行つたんだ」

「待つてください! もしかして、非常コックが動作しなかつたんじや」

「そりだよ? 押しても引いてもビクともしねエ。それで、車掌が戸閉の鍵を引つこ抜いたんじやねエかつて思つてな? それで最後尾まで走つたんだよ」

「……車掌は、乗務員室に?」

「居たぜ。おどおどしながらな」

「そうでしたか。それでは、運転席付近でアナタが感じたことを教えてください」

「運賃箱あるだろ? アツコがひしゃげて、その上に貴婦人のボイラーハツチが乗つかつてた」

「貴婦人?」

「C57のことだよ」

「ああ、盤越物語号のことですね」

「 そうだ。蒸氣はモウモウだつたし、かなり湯も入つてきてたから
な」

早川は事細かに事実を話す。

その間も、女刑事の表情が暗くなりつつあることを感じていた。

事故が事件に。そして解明

「なんでー。さつきから暗い顔してよー」

戸川はわざとらしく言つ。

女刑事は少し迷つた表情で、「実は……」と切り出した。瞳はかすかに潤んでいる。

「はー、なるほどね。あの車掌つて、お前さんの弟なわけね。んじゃ、業務上過失致傷で逮捕も止む無しになつちまつたな」

「ええ、そうなんです……」

「でも新米なんだろ？　まー韓国の地下鉄火災と同じこになつちまつたるものや。執行猶予くらい付くだろうぜ」

「でも！　でも、直哉がそんなミスをするなんて、私、信じられなくて……」

「うーん」

戸川は唸つて考えた。

聞けば、弟の直哉は新津の育ちで、小さな頃から車掌を目指してた。そして去年夢がかなつて、今日が初業務だつたらしい。

「直哉は昔から、『車掌の仕事は一に戸閉、二に戸閉だつて……』

涙をこぼしながら語る女刑事に、戸川は少し考え込んでこうつた。

「ま、少し思い当たるふちがあるがな」

そういつた戸川の顔を女刑事が見つめた。

「おかしいだろ。韓国の鉄道事故があつたのが4年前で、それと同じようにしちまつつてのは」

続けて戸川は「その直哉の同期で、車掌になれなかつたやつ、居るだろ?」といつと、女刑事の顔色が変つた。

「そういえば、直哉に度々つかつて來たつて……」

「そいじゃ一話が早えー。こりやそいつの仕業だ」

「どうしたことですか？」

「まー聞け」

そういうつ戸川はショートピースに火をつけて一服すると、足を組んだ。

「まず、その同期が直哉のマニユアルをすり替えたんだ。そして、何かしらの不手際があつたときに、直哉に日勤教育を受けさせようとしたんだな」

「でも、それとC57の衝突と繋がりがないじゃないの」

「いや、これもその同僚の仕業だらう。要するに、『玉突き』なんだよ。列車の運転手って」

「玉突き?」

「一番のエリートが運転手で、次が車掌つてな具合にな

「一拳に一人を追い出せば……」

「そうさな。多分、犯人は一人だぜ」

「まず、駅勤務に一人。そして、C57に一人……！」

「おそらくC57の一人はボイラー係だらう。列車の運転士には、色々規格があつてな？ 一定の地区しか運転できない免許もあるんだよ。多分、そいつが」

戸川がそこまで言つと、女刑事は交番を飛び出していく。

「コレにて、一件落着。かな」

そういうつ交番の巡査が飲み干したコーヒーの缶に短くなつたピースを放り込むと、満足そうに交番を去つた。

「なかなか、いい女だつた」

最後に見せた強い輝きを放つ黒い瞳を思い出しながら呟く。

4番線の端つこで、上司らしき男に大声と身振り手振りで事情を説明する姿を見た戸川は、微笑むとタクシー乗り場で車に乗り込み、短く「程島」と告げた。

「それにしても、面アわれなくて良かつたぜ

「お密せん、何か？」
「いや、なんでも」

その頃交番の巡査は、さつきまでここにいた坊主頭の顔をどこかで見た覚えがあるといつ風に、パトロールから戻った巡査部長に話をた。

すると、巡査部長は田の色を変えて「バカタレ！ そいつア戸頭組若頭筆頭の戸川十一だ！ なんで気付かなかつた！」と唾はきながら怒鳴りつけると、胸元の無線機と本庁を繋いだ。無線がつながる暫くの間に、壁に貼られた戸川の顔をこぶしで殴りつけた。

指名手配犯、戸川十一。

日本で最初に懸賞金をかけられた大悪党。
そして、日本のラスプーチンとも呼ばれた天才窃盗犯でもある。

事故が事件に。そして解明（後書き）

完結しました。初めての小説なのでへたくそで強引ですがあしからず。

オールフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513l/>

新津発新潟行

2010年10月14日14時54分発行